W・S・クラークと新島襄

同志社社史資料センター社史資料調査員　小枝弘和

クラークの同志社訪問

'Boys, be ambitious!'と聞けば、多くの人々が、かの札幌農学校の教頭を務めたクラーク博士を思い起こすであろう。今から134年前の1877年5月9日、そのクラークは確かにこの同志社大学今出川キャンパスを訪れて、新島襄とJ・D・デイヴィスに会い、後日50ドルを寄付した。この事実を知っている人はどれほどいるであろうか。

軍服姿のクラーク（Amherst College Archieves & Special Collections所蔵）

クラークが同志社を訪問したのは、札幌農学校教頭の任期が終わり、帰米する途中であった。クラークがわざわざ京都の同志社まで足を運んだ理由は、当然新島襄がいたからである。クラークにとって新島は、彼が札幌農学校の生徒である佐藤昌介に宛てた手紙で明言しているように、彼にとっての最初の日本人生徒であった。教え子の活躍を目にしたいと考えるのは教師としては至極当然の感情であろう。

アマースト・カレッジでの出会い

では、いつ二人に接点があったのかといえば、彼らの出会いは、アマースト・カレッジが最初であったと考えられる。1867年9月、新島襄はカレッジに入学した。ちょうどクラークはこの時カレッジの教授であり、同時に開講を間近に控えたマサチューセッツ農科大学の学長に8月に就任したばかりであった。クラークは9月からおよそ1ヵ月間はカレッジで化学を教えており、新島はこの授業を受けたと想像される。たとえこの時に二人の出会いが無かったとしても、農科大学はカレッジと2㎞ほどしか離れておらず、初期の農科大学は教員不足からカレッジの教員の協力を仰いでいたし、逆に農科大学の教員がカレッジに赴くこと

もあった。農科大学の学生の礼拝は、開講後数年間は、カレッジのジョンソン・チャペルで行われていたし、それまでにカレッジに日本人が入学した事例は認められない。一方で農科大学に開拓使が派遣した日本人学生が入学してくるのは1872年である。このようにして考えれば、カレッジが二人の出会いの場になったことはまず間違いないであろう。

クラークと札幌農学校一期生
（同志社社史資料センター所蔵）

お互いの印象

新島がカレッジ在学時代に書き残したものが少なく、クラークのことをどのようにみなしていたかはよく分からない。一方、クラークもカレッジの教員時代の手紙がほとんど存在しないため、この時の新島の印象を書き残したものはない。二人の印象はどのようなものであったのかはよく分からないが、新島はクラークの良い評判を聞くことは少なかったのではないかと思われる。クラークは確かに魅力的な教員であったが、新島がカレッジに入学する直前まで農科大学誘致運動に専心していた。そのため、カレッジの義務がおろそかになっていたと批判する当時の学生がいる。この時、クラークは州議会の下院議員に選挙で選出され、農科大学をアマーストに誘致する仕事を担っていた。そして、町の人の期待を一身に背負って、誘致を実現する。これは彼を州議会に送り込んだ人々の期待を実現したという意味では高く評価されるが、カレッジの学生としては教授として良い評価を行うことは出来なかったであろう。新島もこのようなことを聞いていたのではないであろうか。新島のこのころの手紙に出てくるのはもっぱらシーリー教授である。ちなみに、シーリーはカレッジでクラークの1年後輩である。

二人の関係

現在のところ、二人の関係がよくわかる資料として残っているものは、新島遺品庫（大学今出川校地）に収蔵されたクラークの手紙である。全ての手紙がクラーク帰米後の1877年以降に交わされた。そこから窺えることは、クラークが札幌農学校で教えた学生たちの助力を新島に頼んだこと、新島が京都農牧学校の教員斡旋をクラークに頼んだことなどである。同志社に現存するクラークの手紙は7通で、その内容から互いが互いを必要としていたことはわかるが、どれほどの交流があったのかは今のところわからない。事実としていくつかの接点が残るのみである。クラークにしてみれば、新島はともに「イエスを信ずる者」として

の誓いを交わした農学校の学生たちの事後を託すにたる人物であったし、新島にしてみれば、クラークは農牧学校教員斡旋の事例にみられるような、いざという時の相談相手であったと考えられる。特にクラークにとって日本に新島がいることが心強かった。クラークの影響を受けた学生らがのちに設立する札幌独立基督教会は、その性格上、他の教派から問題視されることが多かったが、これを救ってくれたのは他ならぬ新島であった。

二人の共通点
―アマースト・カレッジ卒業生

クラークと新島の生涯を見ていくと、両者には共通点がある。第一に、ともにアマースト・カレッジの卒業生で、クラークは新島の25年先輩になる。クラークはbachelor of artsの学位を1848年に取得し、新島はbachelor of scienceの学位を1870年に取得した。これら二つの学位には大きな違いがある。いうまでもなく、bachelor of artsは正規に卒業した学生が、学んだすべての学問に対してその習熟度を認められた学位であり、一方でbachelor of scienceは、限定された分野の習熟度のみが認められた学位である。ともにキリスト教的な意味で品行方正な学生に認められる学位ではあるが、厳密には大きな違いがある。この違いが示すところは、カレッジの自由教育をどの程度習熟していたのかを大学が学位名によって分けていた点にあろう。

そのほかにも二人には面白い共通点とそこに見られる大きな違いがある。それは二人がともに学校長経験者でありながら、そこで目指した大学構想がまったく異なることである。

二人の共通点
―学校長として　クラークの場合

クラークは州立大学であるマサチューセッツ農科大学の学校長（41歳）に、新島は言うまでもなく私学同志社の長（32歳）となった。ちなみに札幌農学校でクラークは教頭であり、学校方針に関する多くの決定権は開拓使もしくは開拓使が任命した校長調所広郷が持っていたのでこの場合はあたらない。

農科大学と同志社の発展の過程を見ていけば、興味深いことが見えてくる。まずクラークであるが、1869年8月にマサチューセッツ農科大学第三代学長に就任する。実質的に開講時の初代学長である。農科大学は1860年に成立したモリル法を根拠に設立された州立大学で、農業の発展と振興を目指した学校である。ただし、単に専門技術だけを学ぶ学校ではなく、モリル法には専門教育と共に自由教育も行うべきとの一言が付されている。つまり、カレッジが行っていた自由教育と専門教育を融合する大学であり、クラークはこれに果敢に挑んだ。実際のところ、クラークが構築した農科大学のカリキュラムは、農学専門の教科に、自由教育のエッセンスを加えたものである。このエッセンスとは、母国語としての英語教育、教養となる英文学やドイツ語、フランス語、こうした内容をアウトプットする方法論である雄弁術や修辞学とその実践である演説、当然のことながら数学、物理学などの自然科学である。つまり、思考を練る元になる知識のインプットと、それをアウトプットしながら思考を練り上げることで、当時上流階級の子

弟の独占状態となっていた自由教育を、比較的社会的地位の低かった農業に携わる人々にも教えるという考え方である。クラークは「教養ある農場経営者」という言葉を用いて、農科大学の理想を端的に表わした。クラークが考えた学校構想は、明らかに彼がカレッジで学んだ内容の反映であった。当然キリスト教の信仰を持っていることは大前提である。

実際、クラークのやり方は世間の批判を浴びた。新聞は農科大学の学生が実践を軽視し、理論ばかり学んでいると批判した。それは農科大学と銘打っているにもかかわらず、農場を営む卒業生が少なかったためである。しかし、新しい実験成果や農機具の大会を開催するなど、着実に成果は挙げていた。ただし、世論とクラークの考え方は大きく乖離していた。

話は変わるが、札幌農学校が農業専門学校らしくないカリキュラムであったことは幾分知られている。実は、農学校開設前のカリキュラム案の草稿は農科大学のカリキュラムの日本語訳である。多少農学重視に変更されているが、農学校は農科大学からカリキュラムを直輸入していたのであるから、日本ではオリジナリティあふれる学校と受け取られたのは当然である。

クラークがなぜモリル法に共鳴し、専門教育と自由教育を融合させることに心血を注いだのかは、彼のドイツ留学体験にある。彼は当時としてはドイツ最高峰の大学の一つであるゲッティンゲン大学に留学していた。2年間の研究の後、博士の学位をとって帰国するが、クラークはドイツの教育に不満をもっていた。彼は、大学入学前に既にギムナジウムにて高い教養を身につけ、大学ではひたすら専門に打ち込む学生をドイツで見た。その制度の優秀さはクラークの認めるところである。しかし、彼はそこに自らが信じるキリスト教のあり方を見いだせなかった。このような観点からクラークはキリスト教のある国こそアメリカであり、キリスト教と自由教育に専門教育が合わされば最高の学問になるとの考え方を抱くようになった。つまり、彼の考え方の基底には常に自由教育とキリスト教によって教養ある人間が育成されるべきという考え方があり、そのうえでの専門教育となるわけである。そしてこれはカレッジ単位で行われる必要があった。

海外留学中の新島襄
（同志社社史資料センター所蔵）

二人の共通点
―学校長として　新島の場合

一方、新島においては少し事情が異なる。というのはそもそも学校の教育内容にまで具体的に言及した史料が余りにも少ないためである。

今判明している史料から見ていけば、新島の考え方はクラークとは明らかに異なる。周知のように1875年に同志社英学校が開校したのち、同志社普通学校、同志社神学校、同志社予備校、同志社病院、京都看病婦学校など、ますます学校規模は拡大されていく。これらの施設や

学校はそれぞれが独自の役割を与えられており、先程のクラークが実践していた、一つの学校の中で教育を完結させる方法とは全く別である。つまり、新島の考えた学校は総合大学である。当然、新島においてもキリスト教の信仰、表現を変えればキリスト教主義は大前提である。

分かりやすい事例としてあげるならば、新島襄が大学設立運動の際に事例として挙げた大学であろう。彼は明らかにハーヴァードを意識していた。もう1校加えるならばイェールとなる。これらはいずれも単なるカレッジではなく、カレッジを含む総合大学である。このような大学を例示した上で、新島は法学部、医学部、文学部などの設置を訴えた。さらには、大学前教育である同志社普通学校の予備門として同志社予備校を設置するなど、彼が学んだアマースト・カレッジとはかなり異なる構成である。当時の唯一の大学であった東京大学を新島が意識していたことや、文部理事官の田中不二麻呂とヨーロッパ諸国の教育事情を視察した影響もあってか、このような大学の構成になったのかもしれない。いずれにせよ、彼の考えた教育階梯は、中等教育機関で人間形成を、大学で専門をと、専門の学問レベルの程度はここでは問わないにしても、ずいぶんと大規模な学校構想であった。

初期の英学校生徒（同志社社史資料センター所蔵）

日本の二つのアマースト

1922年2月、アマースト・カレッジが同窓生に向けて発行する雑誌 *Amherst Graduates' Quarterly* 第42号に「日本のアマースト」というタイトルで二つのエッセイが掲載された。一つは当時同志社の教員であった宣教師ロンバードが描いた「同志社大学」、もう一つはクラークの孫であるクラーク二世が描いた「札幌農学校」である。ここではクラークと新島が関わった学校が日本のアマーストとして紹介されているわけである。

既に話を進めてきたように、マサチューセッツ農科大学も、札幌農学校も、そして同志社も厳密な意味では決してアマーストではない。そして、ロンバードとクラーク二世が描いている内容も、厳密な意味で二つの学校がアマーストであると言い切っているわけではない。クラーク二世は「高度な知性、優れた品性、非利己的な意志が両校に共通する理念である」と述べている。つまり、カレッジが本来持っている、人を育てる姿勢こそが、両校にも共通するとしているわけである。これこそクラークと新島がカレッジから両校に引き継いだものである。今だからこそ噛みしめるべき言葉であろう。